

つな  
が  
り  
ま  
ち  
と

# Sum<sup>04</sup>

茨城県  
東茨城郡  
茨城町

Spring 2018



# Sun<sup>04</sup>

茨城県  
東茨城郡  
茨城町

Spring 2018

## Contents 目次

- 03 特集 | つたえる つたわる  
神社とつながりの原点
- 07 つながりを受け継ぐ  
- 夷針神社を護る人々 -
- 09 まちで暮らす人  
まちを想う人
- 15 まちの守り人  
人とまちを守るため、全力を尽くす
- 17 連載 マチのケンキ
- 18 編集室から



Cover  
写真 / アラタケンジ  
モデル / 松浦陽菜・倉田友美  
撮影場所 / こどもや(小鶴地区)  
“続いてきた人と人とのつながりにふれる”  
築90年以上の建物にある駄菓子屋さん。  
お店に来る子供達はめっきり少なくなりましたが  
親子で遠方から足を運ぶ人もいます。



冬の足音が日に日に遠くなり

射し込む光の色が徐々に変わる

陽の微笑みが土地を包み

朧月おぼろつきが宵闇よいぢやんを照らす

終わること はじまること

節目の季節

人の営み 生き方

関わること つながること

その歩みが 続いていく

Sunは

茨城町とゆるやかにつながる

いくつもの縁を

人々の暮らしや情景と共に

綴り 伝えていきます

# つたえる

神社とつながりの原点

# つたわる

伝える「つたえる」―ある物の作用のある物を経てそこに届かせること―

あるものがその姿でそこに在り続けるには何らかの理由がある

ある時その空気その歩みをもって人々に伝えられていく

それを受け継つぎごうとした人々の憶い

その個と個が集いつながりが生まれた

まちのいたるところに在る神社そこには人々の暮らしやつながり

ひいてはまちという集まりの原点があると思う

その役割や伝えられてきたものをきっかけに

つたえることとつたわること

そして後世に続いていくつながりを考えます

写真「アラタケンジ 文」石川聖太





### 人々の暮らしの中にある神社

町内にある地区の数は約九十。それに対し、神社の数は約六十社。おおよそその地区に神社が建っている、という計算になります。例えば笠間市にある笠間稲荷神社のような規模の大きい神社は町内にはありませんが、その分人々の生活により密着した存在であったのでしょうか。それだけに、それぞれの神社には古くからの言い伝えや謂れがあります。

### つたえられることの意味

町内の神社の一つ、下石崎地区にある神塚神社は、大同元年〔西暦八〇六年〕に建立とされています。社に祀られている武甕槌命たけのみかづのりみことが遣したとされる小石が、古くから勝負事を勝ちに導くと言いつたえられており、茨城県内の有名スポーツチームが、お忍びでわざわざ勝利祈願の参拝にいられているそうです。

参拝に来る人はもちろんのこと、地域の人たちや関わる人々が、古くからこの神社の言い伝えを語り継いでいるからに他なりません。

大地に深く根を下ろし、人よりも長い年月を自然の力に育まれ今も生き続けている大木のように、神社そのものもまた、建立から長い年月を経る中、さまざま人が関わっていくことで、地域にとって次第に大きな存在となっていくのではないかと思います。そして気づくと地域そのものの支えとなり、そこに住む人々のつながりが育まれる土台となっている、と考えられます。

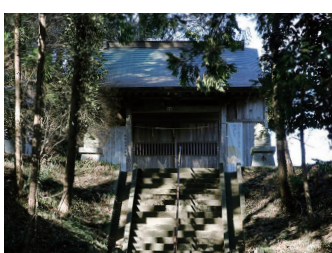
### つながりのはじまりとは

昔から人々の暮らしに寄り添っている神社。それは古くから人々が寄り合う場であり、祭り事をおこなったり、近所の子供たちが集まったりと、世代を問わずにコミュニケーションをとる大切な場所であり、人々のつながりの原点が生まれたところであったのでは、と思うのです。

そしてその背景に、目には見えない輪のようなつながりが生まれ育まれてきた歴史や歩みがある。そのような視点で神社を見ると、そこには遥か昔から続いている人々の憶いや、これからも続いていくであろう、地域のつながりを感じることができるのではないのでしょうか。



**鹿島神社** (宮ヶ崎地区)  
大同二年〔西暦807年〕建立。  
全長約300mに及ぶ参道は町内の神社で最も長い。夏には八朔祭(はっさくさい)が行われる。



**香取神社** (南島田地区)  
元慶三年〔西暦809年〕建立。  
鳥居をくぐるとすぐに急な階段があり、2頭の狛犬が参拝者に鋭い視線を送る。

# つながりを受け継ぐ

—— 夷針神社を護る人々 ——

写真・文 石川聖太



大戸下郷区にある夷針神社は、古くからさまざまな人が訪れる社として大切に護られてきました。現在でも年に数回、決まった日に祭り事が行われています。去る二月十一日に行われた建国祈年祭に特別に参列させていただきました。

厳かな空気に  
宮司の祝詞が響く

住宅地のすぐ側に現れる鎮守の森。今を遡ることおよそ二、三〇〇年前、西暦七二五年の奈良時代に夷針神社は創建され、かまどの神を祀り古くから福を招き身を護るとされてきた、と現在の総代長である黒田保夫さんは話してくれました。

厳かに祭り事が始まり、拝殿の中に祝詞が響きます。神事が終わると、引き続き直会(なおりい)という神様にお供えしたものを参列者で分けあつて食べ、宴会をするという儀式に移ります。祈年祭に参列しているのは、代々神職である二宮家の人々と神社のある上郷区・下郷区に住む氏子さんたちです。

夷針神社には現在約八十戸の氏子さんがいます。大きく三つの班に分け、そこから二名ずつを選び一年ごとの当番制とし、毎年十一月に行われる新嘗祭(にいなめさい)の中で役回りを決めます。この役回りを決める方法が大変珍しく、くじ箱と呼ばれる木の

箱を開けると折りたたまれた紙が入っており、それを一人ずつ箸でつまみます。すべての人が取り終えた後、宮司が紙を開き中に書かれている役回りを各々に任命していくという、まるでくじ引きのような方法が古くから受け継がれています。

## 神社はつながりの原点

現在 氏子を務める皆さんは、自身の父の代、祖父の代と何代にも渡って夷針神社を護り続けています。その中の一人、副総代長の雨谷和人さんは、神社は個人のものではなく、地域の財産であると考えているそうです。「私にとって神社は、そんなにかしこまったものではなく、いつも生活の側にある身近なものです。ここいらつしやる方は、皆さんそう思われているのではないのでしょうか。よく、神社にいたずらをするとかバチが当たるとぞ!と大人から言われましたが、言い換えればそれだけ身近なものであると思うんです」



雨谷さんが小さい頃には、学校が終わると友達と境内へ行きキャッチボールをしたり、夏祭りの時などに遊びに行くような場所だったそうです。

「子供の頃、ふと気づくと神社の境内に祖父の名前が書いてあったり、父が神殿の茅葺屋根の葺き替えをしたという話を聞いていたので、神社の存在はなんとなく頭の片隅にありました。その後私も大人になり、代々続いている氏子を父から引き継ぎました。普段の生活で、同じ地域の人たちと会って話す機会は実はあまりないと思うんです。そんな中、お祭りなどで神社に集まる機会があると、みんな何らかの縁があつてこの地で暮らしているので、お互いにいろいろな話をするんです。このような地区単位の集まりから始まり、だんだんと大きくなることで、それがひいては町となり、県となり、さらに大きくなって国となつていったのではないかと私は思うんです。人と人が集まり、つながる場である。その役割が神社にはあると思うんです。自分が生まれた地への恩返しという意味を込めて、氏子を務めています」

## つながりを受け継いでいくこと

先祖代々神職の家系で、現在は禰宜(ねぎ)を務める二宮重方さんは語ります。

「今、神社というものを受け継いでいく人たちが、以前より減っています。ずっと昔から受け継がれているものをやめてしまうのは簡単なことですが、これだけのものを新しく創ろうと思うと、簡単にできること

ではありません。生まれた地に受け継がれているつながりを護っていくことが、私たちの使命かなと思います。すし、氏子の皆さんもそう考えていると思うんです。そして、護り継ぐ中で何か新しいことができればもつといいと思います」

地域にある神社は、古くから神を祀り、祭り事を行う中で、人と人とのつながりをつくる原点でもあつたのです。これからの時代、神社と人の在り方はさらに変わっていくと思います。それでも、神社をきつかけに人々のつながりはずっと続いていくことでしょ。●



# まちで暮らす人 まちを想う人

*Feeling & Thinking*

*way to walk  
with heart*

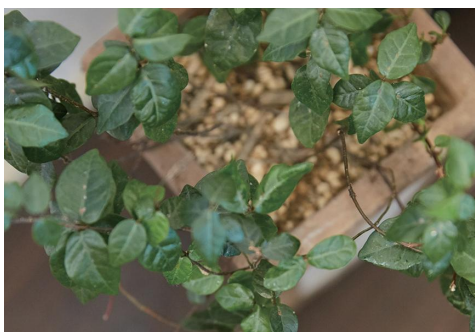
まちで暮らす人  
hair Cherir  
スタイリスト 小沼紗由美

写真：アラタケンジ  
文：米村優子

小沼さんは一九七三年東京都渋谷区生まれ。福島県いわき市、ひたちなか市を経て再度上京。一九九九年から茨城県に在住。一九九二年に資生堂美容技術専門学校卒業後、都内の美容室でヘアスタイリングの技術も磨き茨城県へ帰郷。町近郊の美容室や、結婚式場でブライダルのヘアメイクの技術も従事し、二〇一五年に夫・勝巳さんとともに水戸市にhair Cherirをオープン。一人ひとりの個性を引き出すスタイリングが人気を集めています。

## 自分の力で一歩を踏み出す

小さい頃から手先が器用だった訳ではないし、将来は美容師になりたかったというわけではないんです。でも、昔から美容室に行くのが好きでした。私の髪は母が切ってくれていたの、母や他の人が施術されているのをただ見ているだけ。みんなカットやパーマで整えられてキレイになつていく姿がキラキラして見えて。なんとなく胸が高まるような気がしました。小中学生の頃は、自分で髪の毛をしばったり、



休み時間に友達同士で三つ編みをしあったり。そんなことありふれたことしかしていませんが、次第に美容師になりたいという想いが芽生えていったのかもかもしれません。私は昔から癖つ毛。それがコンプレックスで、中学卒業と同時にストレートパーマをかけました。それが生まれて初めての美容室。真っ直ぐな髪がとにかく嬉しくて。その日は一日中、ツヤツヤの髪に触れていたのを昨日のことのように覚えています。その後ファッションや音楽にも興味を持ち始めて、学校帰りに友達と水戸市内のファッションビルや高島屋へ足を運び、好きだったバンドのライブにも行きました。また都内に叔母が住んでいたの遊びに行きながら一緒にショッピングをしたりと、充実した高校時代でした。

その後高校卒業の時期になり、いざ将来を考えた時に、興味のあった美容師への一歩がなかなか踏み出せませんでした。はじめは一般企業への就職活動もしたんですが、やっぱり違うような気がして。やはり美容師になろうと思った時、母が快く背中を押してくれたんです。その後、資生堂美容技術専門学校で一年間学び、インターンを経て自分で見つけた代官山の美容室で働き始めました。入ってみてからわかったのですが、ここは特殊なヘアスタイリング技術で有名なサロンで。働いていた頃は丁度ダンスブームで、ドレッドヘアやヘアエクステンションなどが流行した時期。芸能人やアーティストらの髪も手掛けていました。美容業界って一見華やかに見えますが、実はハードな仕事。来る日も来る日も、針金に髪を巻きつけて…。大変な毎日でしたが、他にはあまりない技術を得られたのは良かったな、と思います。

## フクロウの音が聞こえてくる家

私が都内で奮闘している頃、実家がひたちなか市から茨城県へ移り変わりました。「縁もゆかりもない土地なのになぜ」と不思議でしたが、訪れてみると両親が選んだ理由がわかる気がしました。国道六号から実家が見えるぐらいの周囲が開けた高台で。遮るものがほとんどない場所なので、遠くに稜線も見える。ただいだけで開放的で心地よくて、素敵な場所なんです。

そして一九九九年に茨城へ帰ってきました。東京暮らしはそれなりに満喫していましたが、お金もかかりますし。気を張らなくていい豊かな生活を改めて知ると、もう都内に戻ろうとは思いませんでした。長男が二歳になった頃、町内の美容室で働き出し、あまり経験の無かった年配向けの施術も多く経験しました。馴染みのお客様が多いせいか、地域の持つ温かみを直に感じました。家で作った煮物や野菜を持つてきてくれるお客様もいらつやいますし。

今住んでいる茨城町の常井地区は、周囲にあまり家もなく、街灯もほとんど無いような場所。夜の暗さがちよと恐いけれども、大自然に囲まれていて、毎日キャンブしているみたいで(笑)。窓を開けると視界に緑が飛び込んでくるので、それに癒やされるんです。時折、フクロウの鳴き声も聞こえてきます。この前は家族がアライグマも見かけたと言っていましたし。小学校までは徒歩で四十分、中学校まで自転車でも四十分。通学には不便に聞こえるかもしれませんが、ここで生まれ育つた子供たちにとってはこれが当たり前の場所。周囲に家がないお陰で、夜に騒いでも近所迷惑になりませんし、子育てをする環境としてはとても良いと思います。この前は長男が近所の方に一時間ほどお茶に呼ばれたり、次男は干し芋をいたたいり。都内では全くと言っていいほどなかった地域とのつながりが感じられる土地だと思えます。この冊子のEや町内で行われているマルシェイベントなどもそうですが、行政が色々な魅力を発見することにチャレンジをしている。風光明媚な景色などは変わって欲しくないけれども、そういう変化はいいのではないのでしょうか。周囲にもっとそのことを知ってもらいたいなと思っています。

## 人生を、好きなことで

ブライダルヘアメイクの経験を積んだ後、同業者の夫と独立して三年。色々な地元の縁に恵まれているなとしみじみと実感します。デビューして初めてお客様をカットした時は手が震えていましたが、キャリアもそれなりに長くなる中で、お客様を通じて沢山のことを学びました。

スタイリングは、限られた条件の中で、その方が元々持っている良さを最大限に引き出すことに気をつけています。もちろん要望には最優先で応えますが、終えた時にその方のモチベーションが上がるようにしたいんです。「どうでしょう?」と聞いた後、その表情がキラキラと輝くようにしたいです。あとは周囲に言えない話でも、美容室だと話してしまうことって結構あると思うんです。お客様との距離が近いぶん、心からリラックスしてもらおうことを第一にしています。

これまで美容以外の仕事をやるうと思ったことはないんです。もつと上手くなりたい、もつと勉強したい、と常に向上心を持って取り組めたことは自負しています。私自身、周囲から「これをやりなさい!」と強要されたことはなく育つてきたので、三人の子供たちにも好きな事をやつて欲しいと思います。色々な世界を知って、見て、経験して欲しい。それは仕事だけでなく、人生にもきつと役立つはずだから。そして、自分の道で生きて欲しい。私がスタイリストとして働く姿を通じて、その想いを伝えたいです。●



## 歴史を受け継ぎ 新しい時代を生きる

まちを想う人  
株式会社誠文堂新光社 代表取締役  
小川雄大

写真 竹内慎 文 ホシカワリエコ

*History and  
a new era*



小川雄大さんは一九六八年東京都新宿区生まれ。祖父は茨城町出身の誠文堂新光社の創業者、小川菊松さん。雄大さんは祖父菊松さんの東京市ヶ谷の自宅で十四歳まで暮らし、その後大学進学、社会人経験をを経て、一九九八年に誠文堂新光社に入社。二〇〇〇年より同社の六代目の社長に就任しています。

## おにぎり一つを持って上京した祖父

私が生まれた時、既に祖父は亡くなっていたので会ったことはありませんが、勉強家だったと聞いています。祖父には兄弟がたくさんいて、育った家庭はあまり裕福ではなかったようです。十五歳の時に一旗揚げようと、おにぎり一つを持って茨城町から上京し、駅の貼り紙のセドリ屋（本の小口取次、売買の仲介業）の求人を目を留め、そのままその会社に入り仕事を始めたそうです。

明治四十五年、二十六歳の時に独立し、翌年には本を出版。その後、大正十三年に『子供の科学』や『無線と実験』という、科学や技術を扱った雑誌を出版するのですが、関東大震災の翌年ということもあり、日本の復興のために少しでも貢献できるものをという考えがあったのだと思います。昭和二十年、第二次世界大戦敗戦からわずかひと月後に『日米會話手帳』を出版すると、三ヶ月ほどで三六〇万部以上を売り上げ、戦後初のベストセラーになりました。昭和五十六年に『窓ぎわのトットちゃん』講談社が出るまでは、国内の本の売り上げ第一位でした。

## 祖母に育てられた幼少期と、本との接点

市ヶ谷の祖父の家は私の母の実家にあたるのですが、幼少の頃はそこで祖母、父、母、姉と一緒に暮らしていました。祖母は私をとてかわいがってくれて、お風呂はいつも一番風呂、食事の際には私にだけ特別なものを出してくれました(笑)。家には本がたくさんありましたが、文学を読んだり何かを調べたりなどはあまりりしませんでしたね。でも、町の書店で立ち読みをしたり、端から端まで見て回る

就任当時の弊社は良くない状態で、負債も多く、それにまつわる裁判もたくさんありました。少し落ち着いてきた頃、今度は雑誌の広告収入が激減。収益があまりなくなってきたので、どん底まで落ちました。しかし、会社をつぶしてはいけないという強い想いがありました。親しんでくださっているお客様を悲しませてはいけない。それに二代で事業を築き上げた祖父や育ててくれた祖母への想い。何もないところから従業員を集め、一つ一つ作り上げて初めて黒字を出すまで、どんなに大変なことだったろうかと…。

私も社長に就任後、十年ぐらいは毎日脂汗をかくような厳しい状況でした。でも私の場合は、既に祖父が築いてくれたものがあり、そこから柱を残してリフォームすればよかったわけで、創業当時の祖父の苦労を考えたら、私の苦労などたいたことではないだろうと、悪戦苦闘の日々をなんとか乗り越えました。



のが好きでした。ほとんど趣味と言ってもいいぐらいに通っていました。その後大学へ進学し文学部に入りましたが、あまり勉強はしていませんでしたね。でも社会人になってからは本をたくさん読みました。本を読むと話し方も変わるし、頭が整理されます。そして所作やしぐさにも表れます。もっと早く本を読んでいたれば…と思いました。

## 人生の転機と茨城の血

バブルがはじけた頃、祖父の創業した出版社は不動産投資などを行っていたため、かなり借金がありました。当時社長だった叔父が会社の整理をする段階の一九九八年に私は入社することになり、二〇〇〇年には社長に就任しました。本来であれば私にまわってくるポストではなかったのですが、祖母に育てられ一緒に暮らしながら縁だったのか、叔父のあとを引き継ぐことになりました。



頭打ちだった雑誌から書籍にシフトし、手芸などの女性実用書へも分野を広げ、ラインナップを増やしました。弊社の強みでもある専門書などコアとなるコンテンツを活かし、デジタル分野も手がけるなど多角的な事業展開を開始しています。茨城県民の血が流れているので、約二十年かけてコツコツと粘り強く取り組んだ結果、今やつと盛り返してきているところです(笑)。

## 想いをつなぎ、新しい時代に向けて

祖父の時代には茨城の方を率先して採用し、また、取引先の印刷会社などにも茨城の方を紹介していたと聞いています。さらに、野球が好きだったので会社の野球部を作り、野球ができる茨城の人を積極的に採用したとか(笑)。叔父が社長を務めていた一九九三年からは、創業者の出身地へ恩返しを、茨城町に寄付や本の寄贈などを始めたようです。今も継続して本の寄贈を続けていますが、祖父の地元の方に「ありがたい」と言っていただけるのは、とても嬉しいことです。今後でも限り続けていって、茨城町の皆さんにたくさんの本を読んでもらえればと思っています。

創刊九十四年を迎えた『子供の科学』は、他の科学雑誌がなくなっていくなど、雑誌が非常に厳しい中で部数を伸ばしています。子供向けではありませんが、骨太の内容で妥協をしない姿勢を貫いてきました。時代に左右されず、今でも毎月書店に並んでいるのは、価値があることだと感じています。一方で時代が変わり、これからはお客様のニーズの多様化に迎え、時代に即したさまざまな媒体にコンテンツを載せてお届けすることが必要になってきています。会社は出版社から総合エンターテインメント企業のように変わっていくかもしれません、伝えたいことを伝えるための、本という文化は変わらなずに残っていくと思います。

今年で創業から一〇六年目を迎えます。一〇〇年以上続いているので、もっと大きな会社になるはずだったのですが、小さくなってしまったので、私がかもう一度大きくしないと死ねないですね(笑)。私の代では祖父が手掛けたがついてきた文芸書もやりたいですし、映画にも挑戦してみたいと考えています。

\*: 代々続けられている茨城町図書館への本の寄贈は、2017年12月時点で7,748冊にのぼる



火災や事故、災害が起きた時、すぐに現場に駆けつけてくれる消防職員の方たち。私たちの暮らしを守るために、どのような想いで活動を行っているのか、お話を聞きました。

## 一日に十二回の緊急出場

茨城町の消防組織は一本部二消防署で構成され、「本部」は事務が主体、「署」は現場が主体で、現在約五十名の消防職員の方が業務に取り組んでいます。事務部門は通常の時間帯での勤務、現場の隊員は二組に分かれ、一日交代で二十四時間勤務を行っています。昔は「消防は楽でいいよね、火事とか救急がなければ何もないんでしょ」と言われた時代もあったそうですが、実際に業務内容をお聞きすると、その業務の多さ、幅広さに驚きます。

緊張状態の二十四時間勤務の中で、火災・救急・救助の実際の現場を想定したさまざまな訓練をはじめ、消火栓や防火水槽の確認、町の施設の点検・立入検査・広報活動や事務業務など…。平常時でも頭を使ったり身体を使ったりで、想像以上の業務をかかえています。

昨年の町のデータでは、救急は二六〇九件。奥谷に消防庁舎ができた昭和四十八年の件数と比べると約四倍に増加しています。多い時には一日に十二回も出場することも。火災は二十二件で昔とほぼ変わりませんが、最近ではポンプ車と救急車が同時に出場して救助を行うP A連携\*が増加。消防隊の出場件数も増えているのです。

## 使命感、そして責任感

火災や事故、災害は、決まった時間に起きるわけではないので、隊員はいつ出場するかわかりません。現場の第一線で活動するということは、危険を伴う作業もあり、肉体的疲労はもちろんなこと、時には悲しい現場に立ち会わなければならず、精神的な負担も

「つらい業務でもありますが、使命感、責任感が自分たちを動かしています」と昨年まで救急を担当していた予防課長の海老沢友一さんは言います。

「救助した方から『この間はお世話になりました』と、町で声を掛けられることが多かったのですが、救急で駆けつける際はマスクをして帽子をかぶっている上に、患者さん自身は切羽詰まった苦しい状況。それなのになぜかこちらの顔を覚えていてくれて、お礼を言われたり感謝されたりするんです。ああ、一生懸命やってよかった、少しでも人のために役に立っているのかな、もつとがんばらなくては、いけないな」と町の人の声は心に残りやりがいにもつながっていたんです」と話してくれました。

いまでは「消防は大変だね」「救急隊ってすごいだね」と言われることも多くなり、消防に対するまわりの認識も変わってきているのを感じます。

## チームの力でまちを守る

消防や救急の要請が重なり、茨城町は組織が小規模のため、現場の人手が足りなくなってしまうことがあります。水戸市や小美玉市などは市内に複数の消防署があるため、人手不足の場合に他の消防署からの応援も可能ですが、茨城町の場合は消防署は一署のみなので、本部の事務部門の職員が仕事の手を止め、火災や救急など緊急対応の応援に駆けつけます。それでもまた人手が足りない場合は、休日の隊員の呼び出しが発生することもある。

緊急対応を終え現場から戻ってきた隊員たちは、止まっていた本部の事務業務を手伝うなど、消防職員の方たちは組織の垣根を越えて、お互いに協力し合いながら活動しています。チームワーク力をもって、私たちの暮らしを守り続けてくれている消防職員の方たち。消防署からサイレンの音が聞こえたら、まちの守り人を思い出してください。昼夜を問わず、私たちの安全のために尽力している人たちがいるということ。

\* PA連携\*ポンプ車(Pumper)と救急車(Ambulance)



# まちの守り人

人とまちを守るため、全力を尽くす

写真 | アラタケンジ 文 | ホシカワリエコ



"いば3"に入会された方には、お手元にサポーターズグッズが届いていることかと思います。このグッズのコンセプトは、「まちというフィールドを楽しもう!」というもの。サポーターズクラブ入会の証である会員証と会員の心構えが書かれた会員の手引き。柄にある言葉が隠れているパンダナ、いば3での活動を記録するノートブック。そしてグッズを入れる"3"の数字がプリントされたトートBAG。  
茨城町を訪れる際や、定期的に開催しているサポーターズクラブのオフ会には、ぜひこのグッズを持ってきてくださいね!  
もちろん普段づかいをしてもOK!  
お友達や趣味の仲間、職場の同僚の方などに"いば3"を広めて、つながりの輪をどんどん広げてくださいね!!!

## From Sun -編集室から-

Sun 第四号をお届けします。

小さいころ、お小遣いを握りしめ、こどもやさんにカードゲームを買いに通ったことを思い出しました。一生懸命に収集していたあの頃の自分に、「君が買って大切にしていたカードは割とすぐに無くしてしまいました。ごめんなさい」と伝えたいです。[がっきー3] / 出会いの季節と言われている春。いば3ふるさとサポーターズクラブでも、たくさんの方との出会いがありました。今年の春もまた新しい出会いや発見があるといいなとワクワクしています。[243] / 今回の表紙は地元民にとって懐かしい写真。ウン十年前、「こどもや」と言えば、ゲーセン、ファミコン、ジャンプ、先輩・後輩…。いろんなことを教えてもらった場所。その時を過ごした仲間が、今、第一線で活躍していると思うと、大人になったなあ、思わず空を見上げてしまいました。(涙) [ふぁんとむ3改めふぁんとむ4] / 前回の季刊誌が発行された後、秋の終わりから冬にかけて様々なイベントに参加し、いば3ふるさとサポーターズクラブのPRをしました。たくさんの方に入会していただき、会員数は530人にも。これからもたくさんの皆さんに茨城町を知ってもらって、興味を持ってもらいたいです。そして、今年は皆さんと何かしたいなあと企画中。みんなで一緒にいば3を楽しみましょう! [クロ73] / いば3がスタートして1年。毎号取材を進める度に、つながりと人との関係に触れている気がします。つながりが人に伝わり、そしてつながる。本誌がその手助けになることを目標に、これからもSunを作り続けます。[YANNA3]

紙面に載せきれなかった写真、取材のお話など、いば3オフィシャルWEBサイトにUPしています。

いば3ふるさとサポーターズクラブ オフィシャルWEBサイト [www.town.ibaraki.lg.jp/iba3](http://www.town.ibaraki.lg.jp/iba3)

次号は、2018年07月発行予定です。

Sun 第4号 春号 2018年4月1日発行

企画・発行：いば3ふるさとサポーターズクラブ事務局  
[茨城町 町長公室 秘書広聴課]  
〒311-3192 茨城県東茨城郡茨城町小堤1080  
TEL: 029-240-7126  
MAIL: [iba3@town.ibaraki.lg.jp](mailto:iba3@town.ibaraki.lg.jp)

編集・アートディレクション・デザイン | i,D

取材・出筆 | 米村 優子 ホシカワリエコ 石川 聖太

写真 | アラタケンジ 竹内 慎

イラスト | Kenbee67

印刷・製本 | 株式会社光和印刷

本誌内容の無断転記、記載、複写を禁じます。 ©Sun all rights reserved.

Special Thanks

松浦陽菜さん 倉田友美さん 斎村紳士 氏子のみなさま こどもやさん  
茨城町消防本部 茨城町立長岡小学校 株式会社誠文堂新光社



“いば3”では  
サポーターを  
募集しています!!

“いば3ふるさとサポーターズクラブ”は、いば3まちが考えるあたらしくてゆるやかなつながりの場です。まちとのつながりをみんなで共有し、魅力・風景・楽しみ方を見つける活動を行います。ご入会された方には、素敵なサポーターズグッズセットをプレゼント。ぜひご入会ください。

お申し込みはこちらから  
[www.town.ibaraki.lg.jp/iba3](http://www.town.ibaraki.lg.jp/iba3)



水辺の切り株で  
体を休めているカワセミ。  
その優雅な姿は、湖面を眺め  
淹れたてのコーヒーを  
愉んでいるイメージが  
似合いそうです。

連載

# マチの ケシキ

第4回 町で会える鳥たち  
イラスト | Kenbee67 文 | 石川聖太

森の奥からアオバスクの  
優しい鳴き声が聞こえます。  
静かな場所で本を読み  
ふむふむと声を出して  
いるのかも知れません。

もしオオワンのように旅をして暮らせるとしたら、  
私たちももっと豊かな価値観を持ってそうな気がします。

陽の光が日に日に柔らかくなり、季節は変わっていきます。町内には、一年を通して各地からさまざまな種類の鳥たちが羽を休めにやってくる。南の国から繁殖のために訪れる夏鳥。北の地から冬を越すためにこの地に降り立つ冬鳥。または遙か遠くの目的地に向かう道すがらの旅鳥。今の私たちの社会に置き換えるとすれば、多様性、多拠点生活のようなものなのかもしれません。

五〇〇系新幹線のデザインモチーフとなった大きなくちばしを持ち、格調高いエメラルドグリーンの羽をなびかせ、春の光輝く湖面を俊敏に飛ぶカワセミ。

ある初夏の夜更け。深い森の奥からアオバスクの鳴き声が聞こえました。大きい目で暗闇を見据えるその凛々しい眼差しは、森の賢者と言われるのにふさわしい表情をしています。遙か遠く北の大地から、たった一羽でこの町にやって来るオオワン。鋭い眼光を放ち、王者のような風格を持ちながらも、時折見せるかわいらしい仕草は、大自然の厳しさと優しさを見ているようにも思えます。

古来から平和の象徴とされる鳥たち。その暮らし方や装いは、とても豊かなものであると思うのです。普段見かけないものを偶然見つけると、人はちよつと幸せになれる。町で会える鳥たちの姿を、そんな風に捉えてみても面白いかもしれませんね。



茨城町は 北緯36度17分 東経140度25分  
茨城県のほぼ中央部に位置します  
日本有数の汽水湖である涸沼を湛え  
豊富な水と里山に育まれた風土です